

レファレンス

コーナー

中朝関係を知る

狩野修一

中国と朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）は「伝統的友誼」関係を朝鮮戦争への参戦や同じ社会主義国であることを通じて長年育んできた。一九九二年の中韓国交正常化以降この関係は形を変えてきているが、国際関係の中で中国の北朝鮮に対する影響力は依然として大きく、核問題をはじめとする東北アジア地域の安全保障や朝鮮半島問題などの解決にあたって非常に重要な意味を持っている。本稿では、当研究所図書館の蔵書から中朝関係を知るための図書資料を紹介したい。

まず中朝外交の歴史・経済関係の大きな流れを知るには、今村弘子著『中国から見た北朝鮮経済事情』（朝日新聞社 二〇〇〇年）があげられる。外交史については唐・新羅の時代から一九九〇年代前半までを概観できる。また経済関係については朝鮮戦争が勃発した時期から一九九〇年代後半までの主に貿易関係について知ることができる。貿易についてはさらに中朝国境貿易に関する一節

が設けられており、中国遼寧省・吉林省と北朝鮮との貿易の実態がわかる。

一九五〇年代から一九七〇年代までの中朝関係については、鄭鎮清著『平壤—中ソの狭間で』（コリア評論社 一九八三年）でより詳しい分析がなされている。当時の中国・ソ連という共産圏の二大強国の間で、北朝鮮が両国にどのように対応してきたかが扱われている。

また比較的最近の外交関係については、野副伸一他著『イラク後の朝鮮半島—東アジアの新局面を探る』（亜細亜大学アジア研究所 二〇〇四年）や中川雅彦編『金正日の経済改革』（アジア経済研究所 二〇〇五年）が参考になる。前者は、毛沢東・鄧小平の時代から胡錦濤が国家主席となった二〇〇三年頃までの対北朝鮮政策および朝鮮半島外交について分析している。後者は、胡錦濤時代が始まった二〇〇三年からの北朝鮮との外交関係の動向について中国の当局者や有識者の見解をもとに紹介している。また中朝両国は双方のうち一方が軍事的な攻撃を受けた場合もつ一方の国は全力を挙げて軍事上その他の支援をするという内容を含んだ「中朝友好協力相互援助条約」を一九六一年に結んでおり、中朝関係を語る上でしばしば言及されるがこの条約の日本語訳が西岡力他著『北朝鮮問題を整理する5ファイル』（自由国民社 二〇〇五年）で参照することができる。

中国と北朝鮮の軍事関係は、朝鮮戦争に義勇軍を派遣して以来の関係があるが、その歴史的流れについては塚本勝一著『北朝鮮軍と政治』（原書房 二〇〇〇年）が参考になる。

中国と北朝鮮の関係はしばしば韓国を含む朝鮮半島の問題、あるいは日米等を含む国際関係として取り上げられる。小此木政夫編『危機の朝鮮半島』（慶應義塾大学出版会 二〇〇六年）では一九九二年の中韓国交正常化により、朝鮮半島の両国家と国交を結ぶこととなった中国の外交政策について分析している。従来北朝鮮と韓国は対立関係にあったため、中国はそれぞれの外交関係に苦慮していたが、韓国の北朝鮮に対する太陽政策により南北両政権の平和共存が志向された。これにより中国は韓国との関係を深めることが可能となり、その結果北朝鮮の中国に対する態度にも変化が表れたと述べられている。また小林英夫編『北朝鮮と東北アジアの国際新秩序』（学文社 二〇〇一年）では、朝鮮半島における安全保障についてアメリカ・中国・北朝鮮それぞれの国家利害に留意しながら検討している。「ならず者国家」としてみられがちな北朝鮮については、自国の安全保障について正当な要求をもつ一つの弱い国家であるという仮説をもって論を進めている。

北朝鮮の核問題は中国にとっても大きな意味を持つ。姜龍範著『米大統領選挙後における中国の対北朝鮮

政策と中朝関係の展望』（環日本海経済研究所 二〇〇五年）では、北朝鮮の核保有により有事の際、国境を接する中国が核の被害に巻き込まれる可能性や日本の軍事大国化・核武装などの恐れがあるとし、朝鮮半島の非核化が対朝鮮半島政策の基調であると述べている。北朝鮮の核問題については六カ国協議などを通じて話し合いが行われているが、この問題への中国の関与については、村井友秀他編著『中国をめぐる安全保障』（ミネルヴァ書房 二〇〇七年）で論じられている。中国はこれまで朝鮮半島においてアメリカとの対立の当事者となることを避けるため「朝鮮問題の朝鮮化」を図ってきたが、今後は韓米軍の朝鮮半島における役割が対北朝鮮抑止のためだけでなく、東アジアの他地域にも拡大された場合、当事者として朝鮮半島に対する安全保障政策を考えていかねばならないことを指摘している。

中朝関係には、国家間の政治的な側面もあるが、国境を接する地域で発生する問題もまた重要である。裴淵弘著『中朝国境をゆく—全長一三〇〇キロの魔境』（中央公論社 二〇〇七年）では脱北者・国境問題・国境貿易など中朝国境で起こっている現状、歴史的背景を外交関係と共に著者の現地での調査をもとに考察しており、中朝情勢を知る上で有用であると思われる。

（かのう しゅうじ／アジア経済研究所図書館）